

序文

安 部 彰

(三重県立看護大学／立命館大学生存学研究所)

本特集のもとになった合評会企画における対象著作は、有馬斉著『死ぬ権利はあるか——安楽死、尊厳死、自殺補助の是非と命の価値』（春風社、2019年刊行）である。同企画は2019年9月22日に立命館大学・朱雀キャンパスで催された。実施にあたり、立命館大学生存学研究所の渡辺克典さん、当日は評者もお務めいただいた立岩真也さん、そして生存学研究所のスタッフの方々にはたいへんお世話になった。記して御礼を申しあげたい。

さて、その合評会企画の様子については、以下の論考をお読みいただければ、当日の評者と著者の応酬の一端もふくめフォローしていただけるはずである。また、この文章を書くために私もそれらの論考をあらためて読んだのだが、じつに内容の濃いものとなっている、という感想を正直なところいだいた。当日の評者および寄稿者を務めてくださった由井秀樹さんと堀田義太郎さんのおかげである。衷心より謝意を表したい。そしてもちろん本企画の主役である有馬さんには満腔の謝意を。

さて、この『死ぬ権利はあるか』は、こんご生命・医療倫理のみならず日本の哲学的倫理学における記念碑的著作へとなりゆくにちがいない。今回の合評会を終えて、私たちはあらためてそう確信している。また、歴史に名を刻む学術的著作はもれなくボレミカルな一書であるが、その点でもこの本は例外ではない。たとえば本企画に先立つ2019年6月22日には京都生命倫理研究会（会場は京都女子大学）において同書の合評会企画が開催されたが、そこでも評者と著者のあいだで白熱した議論がたたかわされた。またその日は、今回司会役にまわった私も評者として登壇したのであるが、拙コメントとともに久保田進一さん、江口聡さんによるコメント、および著者のリプライもすべて南山大学社会倫理研究所の紀要『社会と倫理』第34号に収録され、すでにウェブ上でも閲覧できるようになっている。ぜひとも読者には、そちらもご覧いただきたい。

ところで、このたびの研究企画の形態は合評会である。すると、この序文の務めとしてはやはり対象となった著作の概要を見通しよく紹介すべきである、ということになる。しかし以下では、そのような慣例にあえて反し、

私のかんがえる、有馬さんの著作の意義を述べたいとおもう。なおここからは、こちらは慣例にのっとり、敬称は略させていただきます。

第一に、この本は「安楽死」や「尊厳死」だけを論じた研究書ではない。その射程はもっとひろい。すなわち同書の問いそれじたいは「人には自分の考えで死にかたや死ぬタイミングを選ぶ権利があるか。周囲の人にはそれを見過ごしたり、あるいは死ぬのを積極的に助けしたりすることが許されるか」（同書、p. 3）という問いにまで及んでいる。だからこそ、以下の論考でも「安楽死」や「尊厳死」ということばはほとんど登場しない。後続の論評において堀田が「生命を短縮する措置」と、わざわざ述べているのもそのためだ。また由井が『死ぬ権利はあるか』というタイトルの適切性に疑義を唱えているのも、部分的にはそのような消息にかかわっている。そのうえで私じしんは、この点について、かくのごとく射程をおしひろげることで、動もすると特別視される安楽死や尊厳死の問題を、自殺の是非といった、死ぬことをめぐる倫理一般の問題として扱うことに成功している点を評価したい。だが他方で、たとえば鶴田尚美の書評（ウェブ上で入手可能）のように、むしろそのような射程のひろさが医療における死ぬ権利をめぐる議論の混迷に拍車をかけかねないという批判もみられはするのだが。

第二に、この本は、哲学的倫理学という学問が、ひとの認識にもたらすインパクトの大きさの一端を教えてくれる。たとえば堀田は生命・医療倫理学者としてのキャリアもながいが、にもかかわらずこの本を読んで、「「生命の神聖性（SOL: sanctity of life）」を擁護する立場とされる議論に（修正は必要だとしても）一定の説得力があるということを再認識することができた」と述べている。また堀田は、かかる「再認識」にドライブされて、有馬がしりぞけたSOL説の擁護を試みさえしている。その擁護論の詳細はしかし各自でぜひ直接たしかめてもらうことにして、ここでは以下の論考にみられる有馬と堀田の対決の帰趨について少しだけコメントしておきたい。まず有馬も堀田も「人の命や存在に価値が内在するというアイデアはいかにして擁護できるか」という課題は共有

している。その点では、いわばふたりは同志である。だが「いかなるアイデアが擁護にあたいするか」という点では、両者は袂をわかつ。すなわち有馬は尊厳説こそそれにはかならず、堀田はむしろ SOL 説の方こそ有望ではないかと主張する。しかし以下の論考における有馬のリプライを読むかぎり、その争点は、「内在的価値の理解としてどちらが適切か」を問うていたはずの当初の論点から遠ざかってしまっている。なぜなら有馬は、SOL 説は「個人が耐えなければならない痛みの大きさには限度がないというデメリット」をもっており、それは看過することはできない難点だと批判しているからである。このように批判するとき、明示的に述べてはいないが、おそらく有馬は、これにたいし——つまり SOL 説とは違い——尊厳説の場合は耐えなければならない苦痛には限度があるといいたいのであろう。つまり少なくともその点では尊厳説のほうが有望であると主張したいのだろう。しかし、このとき、もとの論点はすでにうしなわれてしまっている。なぜなら、もはや論点は内在的価値の理解をめぐるものから利益（苦痛）の多寡をめぐるそれへと、すり替わってしまっているからである。

さいごに、この本は、「あとがき」で著者が述懐するように、じつに 10 年以上にもおよぶ粘り強い研究活動の集大成である。だが、いかにして、かくも長期にわたる研究への熱量を保ち続けることができたのか。これは、そのような持続力に欠ける私が同書を読みながらいだいた密かな疑問でもあった。しかし、このたびの合評会のおかげで、いまの私はその答えがすこしわかった気がする。そしてそのヒントをあたえてくれたのは、当日における質問者とのやりとりのなかで、有馬がもらったコメントである。すなわち、どうやらこの本の著者は「この研究にとりくむなかで、みずからの直観に徹底的にこだわった」らしいのだ。なるほど、たしかに哲学的倫理学において直観へのこだわりは、研究を推進する大きな力となる。なぜなら直観とは、平たくいえば、その根拠が不明であるような確信のことであるが、それが強力であればあるほど、その根拠はなんなのかというおもいも、またそれを闡明しようとする探究も、おのずから深いものへとならざるをえないからだ。また直観へのこだわりは、強ければそのぶん、自らとは異なる直観を有する、さまざまな他者への関心を促進しもあるだろうというもの。「なぜ私と違い、あなたはこのようにおもわないのか」とのように、相手の直観とその思考にたいして根源的な疑問がわいてくるからである。かくして、件の疑問を上述のとおり解消したいいまの私は、有馬がこの浩瀚な書物

の大部をさいて他者の議論を執拗ともいえるほど徹底的に検討している消息について合点がいく。だが、そのうえで注目にあたいするとおもうのは、自己の直観へのこだわりこそ、じつは他者理解への原動力にほかならないのではないか、ということである。私たちは、この本を読むことで、そのように自己理解と他者理解とを架橋する情念のもちかたとその方法について、きっと知ることができるだろう。それとともに、「直観なんてひとそれぞれ」という相対主義の誘惑に組み敷かれることは、少なくとも哲学的倫理学においては致命的であるということも。